

「3.11 東日本大震災における寄宿舎の対応と 防災に対する取り組み」

寄宿舎

概要

平成23年3月11日14時46分に宮城県沖を震源地とする、未曾有の大震災が発生した。今回の震災により、防災に対する課題が浮き彫りになった。あらためて震災当日やその後のこれまでの対応を振り返ることで、反省や課題を見出し、今後の教訓としていきたい。

【キーワード】 震災 避難 計画停電 日課 防災 危機管理

1. 東日本大震災発生時の対応

(1) 3月11日の様子

震災発生から夜に至るまでの全体の様子は、表1に記してある通りである。

地震発生時は、高等部女子舎生1名が帰省のため、午後に出舎していた他、舎生38名は登校していた。舎内に残っている舎生はいなかったが、ちょうど高等部普通科の送別会が寄宿舎食堂で催されていた。寄宿舎では引き継ぎが終わったところで、4名の寄宿舎指導員が勤務していた。寮務主任、宿直明けで残っていた1名の寄宿舎指導員とその後駆け付けた寄宿舎指導員の計7名で対応した。

震災後に建物や舎室の点検を行ったところ、地震に備えて舎室の窓など各部屋には飛散防止シートを貼っていたため、ガラスが割れるような被害はなかった。揺れが大きかったために防火扉が閉まったり、舎室の本棚に立てた本が崩れ落ちたり、女子寮1階の廊下に一部ひび割れが起きただけで済んだ。また、電気、ガス、水道などのライフラインは無事だった。

帰省途中だった女子舎生は、携帯電話によるメールで震災発生時は電車の中にいることがわかったが、その後は携帯電話も通じにくくなった。やっと本人と連絡がとれたのは夜になってからだった。保護者も本人と連絡が取れず、避難場所で本人に会えたのは、夜中1時過ぎだった。その間、女子舎生は一人で電車を降りて駅までの長い道のりを歩いて交番に行き、相談した。そこで避難場所を教えてもらい、避難場所に向かった。携帯電話の電池が残り少

ないから、今のうちに保護者に今の居場所を伝えたということだった。聴覚障害者にとって頼みの綱である携帯電話も通じないのではどうすることもできず、女子舎生の様子もまったく把握できないため、焦燥感にかられた。今回は下校前だったことから、生徒の安否確認ができたが、もしこれが下校途中だったらと考えると背筋が凍る思いである。

通学生のほとんどが交通機関の麻痺による帰宅困難となった。当日は舎生も含む、通学生や幼稚部、小学部の保護者に教員の総計166名が寄宿舎に宿泊した。これに伴い、食事提供をどうするかを学校、委託業者と協議した。食堂にあった食材を使って全員に行き渡るように、調理員の方に対応していただいた。

部屋割は、舎生のほとんどが高等部生であるため、高等部舎室に通学生を1、2名入れる形をとった。幼・小・中学部には和室や多目的室を提供した。舎生も突然の震災に気持ちが落ち着かない状況の中、通学生のために部屋を片付けて寝るスペースを作ったり、着の身着のまま来た通学生を気遣い、日用品を貸してあげるなど、思いやりを見せていた。不自由な思いをしているにもかかわらず、不平や不満を言う舎生は誰一人おらず、むしろ快くてきばきと動く舎生の姿を、有難く思い、心強くも感じた。

今回はライフラインが大丈夫だったが、今後、万が一震災によりライフラインが断絶してしまった場合の対策をどうするかが、大きな課題になる。このように連絡体制や緊急時の対応を含め、寄宿舎でも話し合いを持った。詳細は「3. その後の防災の取

時間	全体の動き
14:46	東北・関東で大きな地震発生。(千葉県北西部震度5強) 当時、高等部は食堂で送別会の最中だった。
14:51	各棟を点検。女子寮1階渡り廊下にヒビ、玄関入り口のあたりにヒビ、舎生の部屋は本が落下するなど散乱していたが、窓のヒビ割れはなし。地震発生時に防火扉が閉まった。
15:00	又地震が起きる可能性があるため、全校児童生徒教職員が中庭に避難した。
15:00	体調を崩す生徒が数人いた。寒さ対策も考え、体育館に移動することにした。寄宿舍からは毛布、ブルーシート2枚、布団を運び出した。
17:00	幼稚部および小学部低学年、具合の悪い中高生は寄宿舍食堂で待機とした。その他の生徒は混雑を避けるため、引き続き体育館で待機する。
17:00	食事の配膳について、19時まで待ち、その時点ではっきりした人数を確認してから配膳することになった。
18:55	この時点で、寄宿舍職員7名、幼稚部幼児16名、幼稚部の保護者15名、職員13名、小学部児童20名、小学部の保護者2名、職員15名、計88名が寄宿舍に待機する。
19:00	通学生も交通麻痺による帰宅が困難なため、保護者の迎えが難しい生徒は寄宿舍に宿泊することになった。そのため食事の配膳も変更した。 1度に食堂には入れないので、幼稚部→小学部・中学部・歯科技工科→高等部の順で随時入ることにし、計240名に配膳した。
19:20	地下倉庫から毛布を取り出し、全ての毛布をロビーに搬送する。
20:00	帰宅ができない通学生を寄宿舍に宿泊させるための準備をする。
21:20	舎生38名だけを先にラウンジに集めて点呼。通学生をそれぞれの部屋に入れて1泊してもらいたい旨を説明した。部屋の片付けもあるので15分後に又ラウンジに集合し、通学生の受け入れをすと説明する。
21:40	通学生がラウンジに来て舎生と合流。受け入れを開始した。
21:40	通学生に毛布を配布。 幼稚部→幼児5名、母親5名、教員6名 小学部→児童12名、母親2名、教員14名 中学部→生徒16名、教員11名 高等部→通学生は男子23名、女子22名、教員17名 総計133名を受け入れた。
23:00	消灯 幼稚部は和室、小学部は女子寮多目的室(2階、3階) 中学部は男子寮多目的室(2階、3階)に 宿泊。各部屋には最低二人以上で就寝するようにした。

表1 震災当日の様子



写真1 通学生受け入れの様子



写真2 毛布配布の様子

り組み」以降で述べたい。

(2) 3月12日から14日までの様子

震災発生の翌日、昼には寄宿舎に宿泊していた通学生は、保護者の引き取りなどで全員が帰宅の途についた。学校では、卒業式の延期をはじめ、今後の対策について検討されていた。

寄宿舎では、保護者への連絡は震災当日も舎生の無事を知らせるメールを送ったが、翌日にあらためて電話による連絡を入れ、学校や寄宿舎の建物に異常はないことと、ライフラインも大丈夫だということ伝えた。

また余震が続いているため、舎生の安全確保を考え、部屋割について協議した。なるべく同じ学部同士の部屋割になるようにし、さらに、一人部屋は避けた。少しでも余震による不安を軽減させ、安全確認を速やかに行えるよう、通常は自動消灯になっている廊下の電気を一晩中つけたままにした。舎室の足元灯についても同様である。

同時に、また災害が起きた時に対応できるように、宿直者の増員を行った。12日は5名、13日4名、14日5名で宿直体制を組み、男女子寮に各2名置くことで、舎生と過ごす時間を多く取れるようにした。

2. 舎生の帰省開始以降の対応 (3月15日以降)

(1) 帰省の検討と残留舎生

3月14日～18日は休校、卒業式と修了式は23日に延期となり、舎生は21日まで帰省することができるようになった。3月11日以降、舎生も心細かったと思うが、それ以上に子どもと離れている保護者もテレビなどのニュースを見るたびに余震も多い関東に子どもを置いておくことが心配だったのだろうと察する。休校になったことを保護者に伝えると、帰省させてほしいと申し出る保護者も出てきたので、帰省の検討を始めた。幸い、実家が被災した舎生はおらず、帰省は可能であった。しかし、余震や電力不足による交通機関の混乱も続いていることから、保護者が舎に迎えにきて、なおかつ21日に送りどけられる場合に限って帰省を認めることにした。3分の1の舎生は、帰省先が遠方であることのほか、帰省経路で不通の箇所があったり、被災地に近いため

寄宿舎に留まるほうが安全と考えられたり、さらに、卒業後の進路先への教育相談、引っ越し準備が必要だったりしたため、寄宿舎に残留することになった。

3月15日時点の残留舎生数は、男子14名、女子6名、合計20名であった。16日からは、女子は5名になったので、女子寮1階和室でまとまって生活していた。食事以外なかなか、余暇活動などにも積極的に参加してこない男子もいたので、職員は様子を見に行くように心がけるとともに、限られた生活の中で少しでも舎生の精神的な負担を軽減できるように、日中の過ごし方についても検討を行った。

帰省した舎生に対しては、19日以降に帰省する前に家庭に家での様子、地震を受けて不安な様子になっていないかどうか、帰省する際の交通機関の状況や20日の帰省時間が計画停電の時間と重ならないように連絡を行った。

(2) 計画停電などによる日課の変更

3月14日以降は、電力不足による計画停電が実施された。停電中は、照明、エアコンの暖房やテレビの視聴だけでなく、寄宿舎のほとんどの設備が使用できない状態になる。給水設備が稼働しないので、水が使えない。トイレも使用できない。湯沸かし器が作動せず入浴もできない。厨房のガスは使用できたが調理や片付けができないので食事時間を変更しなければならなかった。地域で停電になることから、外出も制限しなければならなかった。計画停電の時間帯は寄宿舎内で静かに過ごさなければならず、日課もそれに合わせて変更せざるを得なかった。

このように日課が毎日変わるので、夜の点呼時に、食堂のホワイトボードに板書して、だれもが、いつ見ても分かるようにした。食事や入浴もできるだけ明るい時間に済ませるようにした。震災、余震における不安を和らげるため、また表情や様子から、舎生の健康観察をする場として全員が揃う機会を多くとるようにした。

職員間の連絡体制については、日課の変更による混乱を避けるために、1日ごとに停電時間・食事時間・点呼・入浴時間・勤務者等を記入した用紙を作成した。また変更があった場合は赤字で訂正するなど、わかりやすくなるように工夫し、共通理解を図っ

3月14日(月)		3月15日(火)		3月16日(水)		3月17日(木)		3月18日(金)	
7:25	点呼	7:25	点呼	7:25	点呼	7:25	点呼	7:25	点呼
7:30	朝食	7:30	朝食	7:30	朝食	7:30	朝食	7:30	朝食
9:20~13:00	計画停電	9:30~11:00	レク	9:00	技工科生学校へ	9:30~11:30	市川に買い物	9:20~13:00	計画停電
				10:00	図書館へ			(9:43~12:40)	実施
		11:00~	マジックショー			11:30~12:20	昼食	12:00~13:00	昼食
12:00~13:00	昼食	12:00~13:00	昼食	12:00~13:00	昼食	12:20~16:00	計画停電	13:00~	お風呂掃除
							実施	14:00~16:00	お菓子作り
14:00~16:00	送別会	14:00~	掃除	14:00~	掃除				
		14:30~15:00	お風呂掃除	15:20~19:00	計画停電			16:00~17:00	入浴
16:00~17:00	入浴	16:00~17:00	入浴	(15:40~16:40)	実施	16:30~	掃除	16:50~20:30	計画停電
17:00~18:00	夕食	17:00~18:00	夕食	17:00~18:00	夕食	17:00~	お風呂掃除	17:45~18:45	夕食
18:20~22:00	計画停電	18:20~22:00	計画停電			18:30~19:00	夕食	19:00	点呼
		19:00	点呼	19:00	点呼	19:00	点呼		
				19:10~19:30	お風呂掃除	19:30~20:30	入浴		
				20:00~21:00	入浴				
3月19日(土)		3月20日(日)		3月21日(月)		3月22日(火)		3月23日(水)	
6:20~10:00	計画停電								
7:25	点呼	7:25	点呼			7:25	点呼	7:25	点呼
7:30	朝食	8:00	朝食	8:00	朝食	7:30	朝食	7:30	朝食
						8:30	登校	8:30	登校
9:30~11:30	レク	9:30~	お菓子作り						
							昼食は学校にて	11:00~13:00	昼食
12:30~13:00	昼食	12:00~13:00	昼食	12:00~13:00	昼食	12:20~16:00	計画停電		帰省
13:50~17:30	計画停電								
		14:30~15:00	お風呂掃除						
		14:30~16:00	レク	15:20~19:00	計画停電				
		16:00~17:00	入浴						
17:30~	お風呂掃除	17:00~18:00	夕食	17:00~18:00	夕食	17:30~18:30	夕食		
		18:20~22:00	計画停電						
19:00~20:00	夕食			19:00	点呼	19:00~20:30	送別会		
20:00~21:00	入浴			19:10~19:30	お風呂掃除				
				20:00~21:00	入浴	21:00~22:00	入浴		
						*	計画停電実施		

表2 計画停電に伴う日課変更表

た。

①食事や入浴時間

点呼、入浴時間、食事時間は毎食とも時間を決め、通常とは違い一斉に食事をする形とした。毎回食事の挨拶を皆でして、少しでも和やかに過ごせる時間を作るようにした。

食事の時間については、食堂の栄養士と食事を準備する時間や片付けの時間、次の食事の仕込み時間のことも考慮しながら食事時間を組み立てていった。また、舎生数も帰省する時期によって毎食ごとに変化するので、食数の確認の方法についても確認した。震災後の舎生の気持ちも考えて、夕食時間に停電が

当たる場合は、できるだけ明るい時間で食事をとれるようにし、なおかつあまり早い時間にはなり過ぎないようにと考慮した。

②部屋割

随時帰省する舎生がいるため、毎日部屋割を変更し、一人で就寝することがないようにした。余震も続いていたので、避難を考えてまとまった低層階のフロア、1階・2階で就寝するように部屋割を組むことを念頭においた。

③外出

安全の確認がとれないので13日から22日まで外出禁止とした。寄宿舎で過ごす時間が長い上、計画停

82 「3.11 東日本大震災における寄宿舎の対応と防災に対する取り組み」

電に伴い水道が止まったので、多目的室には、ウォータータンクに麦茶を入れて対応した。どうしても外出したい人は、必要なものがある場合のみ申し出るようにと相談して対応していった。

④宿直体制

寄宿舎指導員の勤務については、長期の対応をみこし定時に勤務して、対応する職員も負担のかからないようにした。宿直は指導員を1名増員して4名体制とし、各寮に職員を2名以上おいた。宿直当番職員は夜間の緊急時に備え、日毎の部屋割表を避難名簿として常備した。

⑤余暇活動

学校も休校となり、寄宿舎でも外出もままならない中、少しでも舎生の精神的な負担を軽減できるようにと、レクやおやつ作りなどの余暇活動を企画した。日中に寄宿舎指導員2名だけでは対応が難しい

ので、運営舎監の先生を通じて各部の先生方に応援いただいた。補聴器の電池の売り切れで困っている時に、補聴相談室に問い合わせ、業者に連絡いただいたり、寄宿舎で過ごす時間を快適にと副校長がDVDを持ってこられたりと、各部から多くのご協力をいただいた。

震災の後、初めて外でバレーボールやバトミントン等をして活動していた時の舎生はとても嬉しそうだった。また買い物に行った時には、スーパーに物が売っていないことや、買い物客で混雑している様子を目の当たりにし、現状を重く受け止めた様子だった。また、おやつ作りでは、スーパーには物が売っていない状態であったので、作るものは限られていたが、みんなで和気あいあいと楽しめる空間を作れるように心掛けた。

12日（土）	外出なし
13日（日）	国府台、市川へ買い物（指導員引率）
14日（月）	外出なし。午前中送別会の準備
15日（火）	9:30～11:00 レクリエーション（バレー、バトミントン）花壇の土作り 11:00～ S君のマジックショー O君の物真似
16日（水）	9:00～11:00（歯）教員の引率のもと、登校 10:00（高）教員の引率で図書館へ
17日（木）	9:30～11:30 市川周辺へ買い物（教員引率）
18日（金）	14:00～16:00 グミ、焼き芋作り。食堂でトランプやDVDを観て過ごす
19日（土）	9:30～11:30 体育館でレクリエーション（バスケ・バレー・バトミントン）
20日（日）	9:30～ おやつ作り（ホットケーキ）13名参加 14:40～16:00 体育館でレクリエーション（バレー）
21日（月）	部屋の片づけ
22日（火）	国府台まで外出。市川へいく場合は申し出る形をとった

表3 余暇活動の時間割



写真3 寄宿舍前でレク



写真4 舎生がマジックを披露

⑥舎生の引き渡し（閉舎時の帰省）

3月23日、卒業式、修了式後の帰省に当たっても、計画停電による交通機関の混乱が続いていたために、保護者が同伴できない舎生には、最寄りのターミナル駅や空港まで寄宿舍指導員が引率をした。

地震は、24時間いつ起こるかわからない。均等だとすれば、図1に示したように、舎生の就寝時を含めた「舎生は舎内、宿直者3人で対応する」時間帯が1番被災する可能性が高く多く（47%）、次いで「舎生が外出している可能性のある」時間帯（24%）、3番目に今回、地震が発生した「舎生の登校時」の時間帯に被災することとなる。ちなみに、舎生が就寝している時間は、全体の34%に当たる。ここでは、

3. その後の防災の取り組み

(1) 舎生の動静

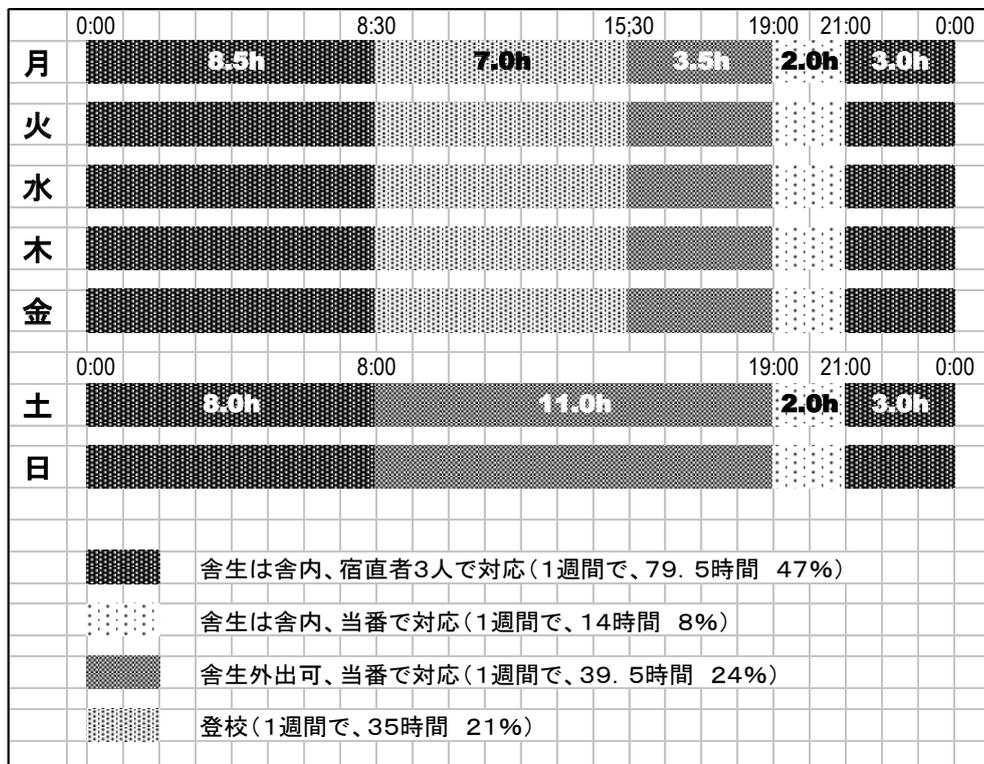


図1 舎生の動静と職員の勤務態様

東日本大地震発生時の対応で得た経験から、これまでの寄宿舍における防災対策について、舎生の動静と職員の勤務態様に沿って検討した結果を報告したい。

①「舎生は舎内、宿直者3人で対応する」時間帯

●これまでの取り組み

避難計画の基本

年5回行う避難訓練の基本の想定

●震災後に追加した取り組み

日常の点呼を避難時の点呼と同様にした

舎室内の整理

非常持ち出し袋の定位置を決めた

舎室内の常夜灯の点灯の励行

就寝を含めた21:00から翌朝、登校または外出するまでのこの時間帯の避難を、火災、地震に対応する避難計画の基本としてきた。宿直する舎監と2名の指導員で、舎生の安全確保を行うために、設備、備品を整備してきた。避難訓練においても、勤務する職員が多くいる時間帯を想定した場合でも、避難誘導等に対応する職員は宿直者3人で行うようにしている。つまり、この時間帯の避難対策が、ほかの時間帯でも舎内にいる舎生への避難対策になると考えている。

舎生の外泊や保護者や研修生の宿泊で変化する寄宿舍の人員数や病気やけがで静養室に移動するなどの居室の確認は、職員室に掲示している舎生数表や部屋割表、引き継ぎ用の寄宿舍日誌で行っている。これらを毎日一覧表にして、宿直する舎監へ連絡簿として渡し、点呼時に利用してもらっている。

震災後も引き続き、これまでのこの避難誘導の手順を含めた避難計画を継続して行っている。

一方、避難計画をより充実するため、平成22年度の避難訓練の反省から、平成23年度は門限の点呼を避難時の点呼と同様に男女子各寮長が宿直する舎監に報告するよう手順を変更することと、運営舎監を通じて各部に寄宿舍の避難マニュアルを伝えることとした。また、平成22年度より実施されている安全点検から、舎室ではクローゼットの上に置くものや

部屋を片付けることについて指導してきた。震災とは別に予定していたこれらのことも、震災を経たことで新年度当初の実施より、舎生も意識的に取り組む様子が見られた。

さらに加えて、震災後の生活から、非常持ち出し袋が速やかにとれるように、舎室のドアの内側にかげられるフックを取り付け定位置とした。また、ドア付近に物を置かないようにして、ドアの両側にある室内の足元灯を就寝時には点灯させるように指導することにした。

②「舎生が外出している可能性のある」時間帯

●これまでの取り組み

ホワイトボードの行動表、外出簿への記入

携帯メール、災害伝言板での安否確認

舎生手帳、筆記具の携帯

●震災後に追加した取り組み

避難所で待機し、舎からの連絡を待つ

軽食の携帯の励行

この時間帯は、舎内にいる舎生の避難誘導だけでなく、舎生の安否確認が重要になってくる。外出といっても、部活動等で校内にいる場合、引率されて校外にいる場合、私的に外出している場合などがある。さらに、私的な外出も通院や買い物で近くにいる場合、外出許可範囲内の70km圏内にいる場合、帰省途中で遠距離にいる場合など様々な状況が考えられる。この時間帯を含め、舎生の動静は、まず、ラウンジにあるホワイトボードの行動表から「在舎」、「外出」、「登校」、「帰省」を確認し、玄関の職員室に面したカウンターにある外出簿から「外出先」が確認できる。登校日以外に部活等で学校に行く場合にも、外出先として学校と記入させることにしている。

外出している舎生の安否確認は、外出先で身の安全を確保したら、舎生から舎に連絡することとしてきた。携帯電話からのメールのほか、電話の依頼、災害伝言板の利用を指導している。また、舎生が寄宿舍に携帯電話を持ち込む際は必ず電話番号、メールアドレスを寄宿舍に知らせるようにし、寄宿舍の

メールアドレスを登録させるようにしている。そして、寄宿舍からも外出している舎生にメールを送信、災害伝言板で安否確認ができるようにしている。しかし、今回の震災では、携帯電話のメールを含めた通信の混乱を経験した。帰省途中の1名の舎生の安否確認がたいへん困難だった。さらに、交通機関の混乱から、移動も困難な状況であった。

外出先で被災した時の心構えとして、身の安全を図り、安否確認の連絡をすることまでの指導では、舎や保護者との連絡や、舎生が舎に戻る、職員が引き取ることなども滞り、外出先で長く不安な思いで過ごすと考えられた。

一方、被災先で、適切な避難誘導が行われたり、避難所が開設され、身の安全が確保される状況もあった。今回、帰省途中で被災した舎生も避難所で過ごし、保護者の引き取りを待つことができた。そこで、外出先で被災した場合についての心得として、「身の安全を図る」、「安否を知らせる」に、「安全な場所で待機する」を加えることとした。このことを指導するに当たって、2学期に行われる「防犯・防災デー」で、この帰省途中で被災した舎生の経験談を紹介し、舎生間で話し合う機会を設けた。

4. 防犯・防災デー

寄宿舍では、年に3回火災、年2回地震を想定した避難訓練を行っている。また、舎生の防災意識を高めるために、毎年9月に「防犯・防災デー」を行っている。当初は平成13年度に「防災デー」として始まったが、平成20年度に防犯のことも取り入れ、現在の名称として今に至っている

今年度は東日本大震災が起きたこともあり、震災時に取るべき行動についてグループ討論を通して考えること、非常食の体験を行うことをねらいとした。

(1) グループ討論

東日本震災発生時に帰省途中だった卒業生の体験をもとに、二つの議題を設定した。

議題①

「卒業生は、帰省する途中で地震に遭いました。あなただったら、どのように情報収集をしますか？」

地震が起きると、

- (1) 電話は通じにくい、使えない。
- (2) 携帯のサイトには接続しにくい。
- (3) メールは送受信するのに時間がかかる。
- (4) 携帯電話の電池がない。

この4点を踏まえて、あなたなら、どうしますか!？」

議題②

「大地震が起きて電車が急停止し、電車が動く見込みがないとわかった場合、どうしますか？」

表5 グループ討論の議題

同じ聴覚障害を持つ卒業生の実体験ということもあり、真剣に考えながら意見を述べていた。中でも避難所で待機することに関して、意見が多く出され、舎生の中でも高く意識していることが伺われた。ほかにも筆談用にメモや筆記用具の携帯に加え、軽食を携帯することも紹介した。緊急事態に遭った場合は、以下の三点を心がけるよう、舎生に伝えた。

- ①舎と家にメールする。災害伝言板にメッセージを登録する。
- ②避難所で待つ。
- ③舎からの指示を待つ。



写真7 グループ討論の様子

(2) 非常食の体験

東日本震災時に非常食を摂った在舎生もいたが、今年4月に入舎した舎生もいるので、全員で非常食を試食してみた。

今回は東日本大震災の時に摂ったスープとビスケットを用意した。ビスケットは味がついていないので、学校で常備している乾パンについているチョコクリームを模倣して寄宿舎でも同様のものを用意した。3種類のスープをそれぞれレシピ通りに調理したが、缶切りが使えない、カセットコンロの使い方がわからなく戸惑っていた舎生がかなりいたことに驚いた。



写真8 非常食を作っている様子



写真9 非常食

(3) 実施後のアンケートの結果

今回の防犯・防災デーを通して、アンケートを書いてもらった。アンケートの結果の一部を抜粋する。

<設問1>印象に残ったことは何ですか？

- ◇話し合ったことについて
 - ・経験者として改めて考え、説明するのにいい機会になった。
 - ・それぞれの班の話聞いて、親や先生に連絡することの大切さを知った。
 - ・グループで、ある場面するとき、何をすればいいのか話し合ったことで色々な意見が出て、自分が気付かなかったことが出てきて、いい勉強になった。
 - ・地震が起きた時にまずどうするかという対策について話し合ったことが一番印象に残った。
 - ・自分以外の意見(考え)を知ることができて良かったです。
- ◇非常食について
 - ・非常食を作って食べたこと。(3)
 - ・非常食は水がなくても食べられる。保存期間が25年と知り、びっくりした。
 - ・初めて非常食を食べたこと。
- ◇体験談について
 - ・卒業生の体験談(6)
 - ・卒業生の方が私達より大変な状況に遭ったことに驚いた。
 - ・電車で3分の距離を2時間もかかったことにびっくり。
 - ・電車の中で止まった時の状況、その後の行動について参考になった。
 - ・卒業生さんが帰宅中に地震が起きたあとから、家に着くまでの間がすごく大変だったのだと思った。
 - ・3月だから日が暮れるのも早くまだ寒いだろうに、そんな状況でしっかり行動したことを見習いたい。
- ◇その他
 - ・情報収集の難しさ。
 - ・携帯が使えないだけでこんなに不便になるとは思わなかった。
 - ・学んだこともあったし、楽しかった。

<設問2>非常食はどうでしたか？

- ・おいしかった。(4)
- ・まずかった。(2)
- ・味はそれほどまずくはなかった
- ・食べられるけれど美味しくない味だった。
- ・チキンシチューは美味しかった。野菜スープはいまいちだった。
- ・ビスケットはのどが渇いてしまうので、水が乏しい時は苦しいかと思う。
- ・単体で食べると美味しくないけど、何かアレンジすることで食べやすくなると思う。
- ・腹一杯食べられた。非常時でも少しは不安要素を取り除くことができると思う。
- ・3つの味を体験できてよかった。

<設問3>質問、疑問、意見があれば書いて下さい

- ・ A班、B班、C班、D班テーマ別に考えれば答えもだぶらずに楽しめたかも。
- ・ 何の予告もなしに緊急事態のシチュエーションを実行してみてもどうか。
- ・ 水はもつのかどうか不安だと私は感じた。水がなければ使えない非常食、災害時には水はどのように確保するのか学んでみたい。
- ・ 地震だけではなく、停電、犯罪にまきこまれた時の対処も考えたい。
- ・ 情報をもらうには、身近な人との付き合いが大切なので、挨拶ぐらいはした方がよいと思う。

5. 防災備品について

寄宿舎では、災害時に備えて防災機器に、非常ベル、赤色回転灯、フラッシュランプ、低周波ブザー、バイブレーター、常備灯を備えている。

震災時に宿泊した通学生、職員のためにたいへん役立った毛布は学校の備品だが、保管する部屋が無く、寄宿舎の改修前に使用していた地下の配管スペースに置いていたものだった。

この他に、今回の計画停電や大規模停電を想定して、電池式LEDランタンを舎費で3台購入した。また、寄宿舎では停電がおこると、水道も止まってしまうことから、水を確保するために、ジャグ（大1・小2）クーラーボックス・ウォータータンク（6ヶ）を購入した。

また、3月16日には大学より、必要なものをリストに挙げておくようにと連絡があった。寄宿舎では、卓上ライト、豆電球（足元灯）、乾電池に、衛生面を考えてトイレトーパーやキッチンペーパー、ティッシュにウェットティッシュ、避難生活を送ることを想定して、補食や飲料、紙コップに紙皿、割り箸をリストアップして提出した。

6. 非常食の備蓄

現在、寄宿舎では3日分の非常食を備蓄している。今まで非常食の徴収として、年間約3万円ずつ積み立てを行ってきた。

平成8年より賞味期限25年の宇宙食（クラッカー、シチュー3種類）を1日3食3日分と水（保存水）を購入し備蓄している。それも賞味期限が近づいて

きたこともあり、今後の非常食のあり方について検討を始めたところだった。

3月11日地震当日は、食堂にある食材を使って食事を提供してもらえた。その後も、流通の困難があったり、計画停電で時間の変更があった中で、献立を変更しながら、通常と遜色のない食事を提供してもらえることができた。

今回の地震を機に、食堂には3日分9食分の米80キロを常に在庫として残せるよう使い回してもらうことにした。

さらに、その後、米のほか副食にいても同様に、通常のメニューとしても提供できる缶づめ等を食堂で常備してもらい、普段提供しながら使い回して常時入れ替えていくようにしたらどうか、また、それができれば寄宿舎で重ねて非常食を準備する必要はないのではないかという意見がでた。新しいもので食事をする事で、食材の安全性だけでなく、舎生にとって精神的安定にもつながるのではないかと。また食堂委託業者と連携することにより管理しやすいという利点もある。ライフラインが断たれた場合でも作れるもの、非常時に調理員がいなくても指導員が厨房に入って作れるような体制が望ましいという意見があった。

食堂連絡委員会で食堂委託業者と非常食のあり方についての意見交換を行った。1日3食（9食分）を購入し食堂にて保管してもらうことは可能か、もし可能であれば、日にちを決めて通常の食事として提供してもらい使用した分を補充していくことはどうかと提案した。

食堂委託業者からは、実際に病院では3日分非常時のために備蓄しなければいけないと決まっているので、それに準じて対応できると思うとのことだった。このことを踏まえて、食堂委託業者の栄養士にどのようなものが必要か、3年で更新していけるように3日分の非常時の献立を考慮してもらい、非常時でも通常の食事に近い形で食事ができるように、引き続き非常食の備蓄について準備を進めている。

<備蓄用 献立>約50人分と考えて、以下のように考えている。

1日目

	メニュー	賞味期限
朝	ナビスコリッツ	5年
	クノールポタージュ	1～2年
	みかん缶	
昼	乾燥もち	5年
	もち用水	
	サバの味噌煮	3年
夜	米120グラム	随時
	米用水200グラム	
	ビーフカレー	2年
	コーン缶	随時
	水	

2日目

	メニュー	賞味期限
朝	缶パン	5年
	ミネストローネ缶	3年
	パイ缶	
昼	野菜&きのこ	5年
	粥用水	
	いか味付け	3年
夜	米120グラム	随時
	米用水200グラム	
	ビーフカレー	2年
	杏仁豆腐缶	随時
	水	

3日目

	メニュー	賞味期限
朝	ナビスコリッツ	5年
	クノールポタージュ	1～2年
	みかん缶	
昼	乾燥もち万年	5年
	もち用水	
	サバの味噌煮	3年
夜	米120グラム	随時
	米用水200グラム	
	ビーフカレー	2年
	コーン缶	随時
	水	

※調理用の水は合計70ℓ程度を予定している。
他、調理用とは別に水を今まで通り備蓄する。

7. 終わりに

未曾有の大震災から一年近くになる。今では震災前の生活に戻って落ち着いて生活できているが、未だに余震も続いており、不安は拭えない。

あらためて震災発生時を振り返ると、ライフラインが電気、ガス、水道ともにすべて無事であったこと、ほとんどの舎生が校内にいたこと、地震の発生が引き継ぎの会議を終えた直後という、もっとも多人数の寄宿舎職員が寄宿舎にいる時間帯だったこと、学校の教職員が勤務中であり、舎生も含めた生徒の把握に努めてくれたことなど、幾多の幸運が重なっていた。寄宿舎では日頃から防災訓練を行っているが、余震や計画停電などの非常事態の下での長期にわたる寄宿舎内での生活における行動計画のようなものは確立されていなかった。しかし、日頃の防災訓練や舎生の対応をしていく中で、職員間で非常時にやるべき優先順位の価値観が自ずと統一されていた。そこで、危惧されることや今必要なことは何かを想定しながら、学校と寄宿舎間の連絡を密にし、全校の教職員が協力を仰いで、臨機応変に、かつ、迅速に対応することができたことも大きかったのではないかと思われた。

勿論、3月というまだ寒い時期に舎生の健康状態を懸念していたが、元気に生活していたことや通学生の受け入れに関しても困っている人に手を差し伸べようという舎生の姿勢に助けられたことも事実である。

一方で、万が一外出している時に発生した場合はどうするのか。最後は周りの状況を見て自分で的確な判断をしなければならなくなる。そのための情報や知識も日々の生活の中で舎生に教えていかないといけない。無論、我々指導員もいざという時にどう対処したらよいか、普段から指導員間の共通理解を図っていかねばならないと感じている。

今回の震災を教訓に、寄宿舎は保護者から預かっている舎生の生活環境、安全を整える役目と責任があることを重く受けとめていくとともに、より一層、防災訓練や研修を深めることで安全確保を含めた今後の方向性を模索していきたいと考えている。